

「沖縄群島産貝類目録」所載の多板綱 ウニヒザラガイ (*Acanthopleura*) 属

吉 岡 英 二

On the species of *Acanthopleura* listed in “A catalogue of Molluscan Fauna of the Okinawa Islands”

Eiji YOSHIOKA

Synopsis: Four species of *Acanthopleura*, including synonymous genera, listed in “A catalogue of Molluscan Fauna of the Okinawa Islands (compiled by T. Kuroda, 1960a)” are attempted to be identified with the current valid species names. ‘*Liolophura loochooana*’ and ‘*Acanthozostera gemmata*’ are identified with *A. loochooana* and *A. gemmata*, respectively. ‘*Liolophura caliginosa*’ could be identified with *A. tenuispinosa*. The unnamed species, ‘*Acanthopleura* sp.’ in the catalogue, is expected to be *A. spinosa*.

「沖縄群島産貝類目録(頭足類を除く)」と題された文献* (黒田編, 1960a) には、沖縄群島で確認された2010の軟体動物の種名が挙げられている。また、その奥付けには、この文献が1960年に琉球大学教務部より出版されたものであることが記されている。当時、沖縄は米軍の統治下にあり、その政略的な思惑によって設置された大学の研究環境は必ずしも恵まれたものではなかったという。にもかかわらず、現在でもこの文献はその学術的価値を失っていない。

私は、先に日本沿岸に産するウニヒザラガイ (*Acanthopleura*) 属の種とそれぞれの分布についてを、最近の知見からまとめた(吉岡, 1997)。その際、沖縄方面の分布を確認するために、この「沖縄群島産貝類目録」も資料として参照した。しかし、この文献は沖縄群島という広い範囲で採集・記録された全貝類を網羅的に列挙したもので、個々の種の詳細な産地・分布などの記述がない。そのため、種名とその存否を確認する以外、それぞれの種の分布を議論するにあたっての資料としての価値は高くないものと判断した。また、そこに記された種名・学名の今日的な解釈についても、瀧庸(1962)・瀧巖(1964)などの文献に準ずるものと判断して、それらの十分な考察を怠っていたように思う。そこで、ここでは「沖縄群島産貝類目録」に所載の *Acanthopleura* (およびその synonym とされている属) の種名について、とくにそれらが

*この文献のみならず、この本論で扱った多くの文献は旧い活字によって組まれているが、本文中の表記については引用文を除いて現在使われている一般的な活字に置き換えて記した。

現下に確認されているどの種に相当するのかについてあらためて検討する。

この目録には多板綱の貝類16種が挙げられている。また、その脚注にはこの綱の記録が戦前のものによること(すなわち、この目録が出版された1960年よりもさらに20年以上先立った時期の採集・観察によるものであること)が記されている。その中で、*Acanthopleura*属(および Ferreira (1986) によってそのsynonymとされた属)の種として、以下の4種が見られる。

- | | |
|--|-------------|
| 9. <i>Acanthopleura</i> sp. | 〈和名の記述なし〉 |
| 10. <i>Liolophura caliginosa</i> Pilsbry | オオヒザラガイ |
| 11. ——— <i>loochooana</i> (Broderip & Sowerby) | リュウキュウヒザラガイ |
| | |
| 15. <i>Acanthozostera gemmata</i> (Blainville) | オニヒザラガイ |

後2種「11. *Liolophura loochooana*」, 「15. *Acanthozostera gemmata*」は旧来の図鑑等(瀧庸, 1962, 1965; 池原監, 1983; 西平, 1988)でもよく知られている種で、Yoshioka & Nakashima (1996), Yoshioka (1997) および Yoshioka *et al.* (1999) でも、沖縄本島から八重山諸島にわたって広く分布する種として確認されており、最近ではそれぞれ *Acanthopleura loochooana* (リュウキュウヒザラガイ), *Acanthopleura gemmata* (オニヒザラガイ) と記されることが一般的である(野田, 1992; 齋藤, 1884; 久保・黒住, 1995)。

「10. *Liolophura caliginosa* オオヒザラガイ」については、先の総説(吉岡, 1997)の「まとめ」で、*Acanthopleura tenuispinosa* (キクノハナヒザラガイ)を指したものではないかとする考察をおこなった。そこでは、その根拠として①瀧庸(1962)において記されている *Liolophura caliginosa* の分布範囲が *Acanthopleura tenuispinosa* の分布と類似している点、② *Liolophura caliginosa* の項で (?=*Liolophura japonica tenuispinosa*) という記述がある点、③ *A. tenuispinosa* が一見するとヒザラガイに類似しやや大形であることから「オオヒザラガイ」という和名にも適合している点—の3点を挙げた。また、この種名は「沖縄群島産貝類目録」(黒田編, 1960a)より30年以上先立って出版された「沖縄県産貝類目録」(杉谷, 1927)にも「*L. caliginosa* Pils オオヒザラガヒ(平瀬)(普通)」という形で記されている。そこでの「Pils」は貝類全般の分類学の泰斗 Pilsbry によって記載されたことを示す一般的な略記である。また、「(平瀬)」とは和名の出所として平瀬與一郎氏によったことを、「(普通)」とは産地として「本縣黒潮流域殆ど至る處に發見せられる」ことを示すものであることが凡例に記されている。このことは、この種が黒田編(1960a)や瀧庸(1962)よりかなり以前から周知の種であったことを示している。

Saito & Yoshioka (1993) で *A. tenuispinosa* として追記載した種は、宮古島周辺から沖縄本島周辺および奄美諸島まで分布しており、南方ではシャム湾よりも採集されている (Saito &

Yoshioka, 1993; Yoshioka, 1997; Yoshioka & Nakashima, 1996)。その分布と、杉谷 (1927) で *Liolophura caliginosa* の分布として記された「(普通)」すなわち「黒潮流域殆ど至る處」という表現との齟齬として、この種が八重山諸島では見られない点が挙げられる (Yoshioka, 1997; Yoshioka *et al.*, 1999)。しかし、一般に杉谷 (1927) のような貝類目録において個々の種の存否の詳細を記載することは希であり、この種が *A. tenuispinosa* を指したものであると考えた場合にも、その分布について簡略に「(普通)」と記されることは無理のない記述であろうと思われる。

10. の種名について、吉岡 (1997) では「*Chiton caliginosus* Reeve, 1847 (*Liolophura caliginosa* (Reeve, 1847))」と記したが、正しくは *Liolophura caliginosa* Pilsbry, 1893 であったのでここで訂正したい。この誤りは、国立科学博物館の齋藤寛氏より指摘を頂いたもので、瀧庸 (1962)、肥後・後藤 (1993) の記述などを不注意に引き写したことが原因であった。Pilsbry (1893) に記載された *Liolophura caliginosa* を現下のどの種とするべきか、あるいは別種とするべきかなど、この種名にかかわる分類学上の議論は存在するが、ここでは「沖縄群島貝類目録」に記された種が実際にどの種に相当するか (現下で確認されているどの種を見てその種名が記されたか) というものを考察するにとどめ、分類学上の詳細な議論は後に預ける。

以上の3種 (10, 11, 15) の種名の対応については、これまで実際に沖縄周辺を観察した結果と、それに基づく吉岡 (1997) の見解に沿ったものであり、現在の種の認識を踏まえた上で、とくに疑問を呈する必要はないものと考ええる。

それでは、「9. *Acanthopleura* sp.」は現在確認されているどの種に当たるのだろうか。黒田氏は、何を指して種名不詳のままにこの「*Acanthopleura*」という属名を記したのだろうか。これよりは、この目録に記された「*Acanthopleura* sp.」が何を示したものであるかという問題についての議論だけに絞って稿を進めることとする。

吉岡 (1997) では、日本沿岸に分布する *Acanthopleura* 属として5種を挙げたが、上述の3種 (*A. loochooana*, *A. gemmata*, *A. tenuispinosa*) 以外で沖縄沿岸に分布するのは *A. miles* (コザネヒザラガイ) だけである。また、実際に沖縄本島・宮古島周辺の潮間帯岩礁には *A. miles* が3分間で20個体以上観察されるほどの高い生息密度で見られる場所もある (Yoshioka & Nakashima, 1996; Yoshioka, 1997)。以上の事実から考えると、この「*Acanthopleura* sp.」は *A. miles* を指したものと考えられるかもしれない。しかし、この目録が編まれた当時は *A. miles* を *Acanthopleura* 属の一種とする分類学上の見解はまだ存在していない。Ferreira (1986) の synonym list によると、*A. miles* は1893年に *Chiton* (*Sclerochiton*) *miles* として記載され、Leloup (1939) によって *Squamopleura miles* とされたが、*Acanthopleura* 属とする認識が示されたのは Ferreira (1986) の総説が最初である。いっぽう、この目録ではリュウキュウヒザラガイ・オニヒザラガ

イに対してもFerreira (1986) が*Acanthopleura*のsynonymとした*Liolophura*, *Acanthozostera*の属名が使われている。すなわち、黒田氏はFerreira (1986) のように*Acanthopleurinae*亜科に区分されたすべての属をひとまとめにするような見解・認識を持ってはいない。これらに照らすと、1960年以前に黒田氏が*A. miles*を見て、種名不詳のまま*Acanthopleura*属の一種とするとは考えにくい。

Ferreiraは、全般に多くの属・種などをひとまとめにする傾向が強い。(このような、分類群をまとめることを好む分類学者は、やや批判的に“lumper”と俗称される。) 実際にFerreira (1986) が多くの種名をsynonymとしたことによって、この属の分類は整理され理解しやすくなった。しかし、それが行き過ぎる場合も見られる。たとえば、先に挙げた*A. tenuispinosa* (キクノハナヒザラガイ) は、当初Leloup (1939) によって*Liolophura japonica* forma *tenuispinosa*として記載されていたものを、Saito & Yoshioka (1993) で別種として追記載したものである。この種は、その原記載に照らしても*A. japonica*との相違は明白であるのだが、Ferreira (1986) では*A. japonica*の一亜種とされている。また、小笠原諸島で採集され、Bergenhayn (1933)・瀧庸 (1961) によって*Acanthopleura planispina* (ホウライヒザラガイ) とされた種についても、別種とすべき特徴を持つにもかかわらずFerreira (1986) では*A. gemmata*のsynonymにまとめられている。このような分類学的問題点については、今後再検討していく必要があるだろう。

瀧庸 (1961, 1962, 1965)・瀧巖 (1964) などのリストでは沖縄群島での分布が確認されていない種で、沖縄群島の南北よりその近傍まで分布しているとされているもののうちで「*Acanthopleura* sp.」とされる可能性のある種はあるだろうか。沖縄群島の北方、日本の本州を中心に分布している同属の種としては*A. japonica* (ヒザラガイ) が挙げられる。しかし、*A. japonica*は日本本土沿岸でもっとも普通の種として知られており、日本の貝類全般について豊富な知識を持っていた黒田氏がそれを指して種名不詳のまま*Acanthopleura* sp. と記する可能性はまったくないだろう。また、もしも*A. japonica*を指したものとすれば、当時の見識に沿えば*Liolophura japonica*と記されることが普通で、その点からも*A. japonica*を指す可能性はきわめて低いと考えられる。

では、沖縄諸島の南方近傍まで分布しているとされている種についてはどうだろうか。Ferreira (1986) では、沖縄至近の「台湾」から南方に分布している種として、上述の*A. miles*の加えて*A. spinosa* (ウニヒザラガイ) を挙げている。私は、黒田 (1960a) によって「*Acanthopleura* sp.」とされたのは、この*A. spinosa*がもっとも可能性が高いと考えている。Ferreira (1986) で台湾より南方に分布しているとされる*A. miles*は、実際には台湾からではなく沖縄本島にも分布している。同様に、*A. spinosa*が沖縄群島まで分布している可能性と、その事実を黒田氏が確認していた可能性も充分にあるだろう。Ferreira (1986) によると、*Acanthopleura spinosa*は

*Acanthopleura*属が記載された際のtype speciesであり、それ以降に別の属名で呼ばれた記録は見られない。その形態上の特筆すべき特徴は、肉帯から長い棘状のspineが突き出していることであり、まさに学名の*Acanthopleura spinosa* (および和名のウニヒザラガイ) にふさわしいものである。これらのことから、黒田はこの種を指して「*Acanthopleura* sp.」と記したという可能性がもっとも高いと思われる。

それでは、*A. spinosa*は実際に沖縄群島に分布しているのだろうか。「日本及び近海産ヒザラガイ類」をまとめた瀧庸 (1962) のリストには、その当時の分類学上の認識から*Acanthopleura*属とされた種としては*A. spinosa*一種が記されており、その分布域として“Garanbi, Formosa; Philippines; North Australia”が挙げているが、沖縄諸島のいずれの地域も含まれてはいない。いっぽう、Ferreira (1986) では、*A. spinosa*の分布域の概要について直接に沖縄・八重山を含めて述べてはいないものの、インド太平洋域の北緯25度以南・東経142度以西と記している。その記述に従えば、八重山列島・宮古列島を含めた先島諸島もその分布域に含まれる。しかし、Yoshioka (1997), Yoshioka *et al.* (1999) の調査で、その範囲の潮間帯を集中的に観察したが、*A. spinosa*は確認できなかった。それゆえ、仮にこの種が先島諸島に分布するとしてもかなり希少な種であろうと思われる。

じつは、黒田氏が「沖縄群島産貝類目録」を編集した時期よりかなり降って、1973年11月3日に瀧巖氏によっておこなわれた九州貝類談話会・第1回総会での講演の要旨 (瀧巖, 1974) に付された資料に、日本国内に*A. spinosa*が分布していることを示す以下の記述が見られる。

「(23) ウニヒザラガイ *A. spinosa* (Bruguere) 老成したものは体長125 mm位になる。肉帯の棘は長く10 mm以上になり密生している。尖閣列島魚釣島・台湾・フィリピン・北豪州」

また、そこで述べられた種については手書きの簡略な図も付されており、*Liolophura japonica* (ヒザラガイ), *Liolophura loochooana* (リュウキュウヒザラガイ), *Acanthozostera gemmata* (オニヒザラガイ) とならべて描かれていることから、これらの種からも十分に識別されて記されたものであることがわかる。

この瀧巖氏の資料で*A. spinosa*の分布地のひとつとして記された尖閣列島は、八重山諸島石垣島の北北西175 kmに位置しており、緯度から見るとFerreira (1986) の記述 (25°N以南) よりやや北 (25°44' - 57' N) に外れるものの、地理的には台湾・八重山の近傍であり、*A. spinosa*が分布しているとしても不自然ではない。*A. spinosa*の名前は「沖縄群島産貝類目録」が編まれた当時までの尖閣列島についての印刷物 (正木, 1941; 宮嶋, 1900; 宮島, 1900a, b, 1901a, b) にも、最近に行われた尖閣列島での生物相調査の公式な報告書 (仲宗根・長浜, 1971; 山里他, 1982) にも現れない。しかし、公式なものではないが、尖閣列島より採取された貝類標本を参照し、その種組成などを記した2編の報告 (山本, 1971; 藤岡・黒住, 1880) には*A. spinosa* (ウニヒザラガイ) の名が挙げられている。とくに、藤岡・黒住 (1980) には、仲宗根・長浜 (1971) による公式の報告書に記された*Acanthozostera gemmata* (オニヒザラガイ) は誤同定であり正し

くは *A. spinosa* である旨が述べられており、写真も付されている。これらのことから、尖閣列島に *A. spinosa* が分布している点については確かであろうと考えられる。また、山本 (1971) に挙げられている尖閣列島魚釣島の貝類のリストの冒頭には「○ヒザラガイ類 (瀧巖博士同定)」と記されている。瀧巖氏は、その際に山本氏から同定依頼を受けた標本を根拠に、上述の講演資料 (瀧巖, 1974) に *A. spinosa* の分布範囲として尖閣列島を加えたのだろう。

尖閣列島は現在では無人の島嶼で、さまざまな事情によって近寄り難い状況になっているが、戦前までは鰹節工場などもある人の住む島々であった (緑間, 1984)。そのため、おそらく現在よりも調査等に赴くことも容易だったのではないかと想像される。上述のとおり、尖閣列島に *A. spinosa* が分布していることは確かであろうし、その事実が「沖縄群島産貝類目録」執筆時に黒田氏によって確認され、種名不詳のまま「*Acanthopleura* sp.」と記されたと推測することも可能であろう。しかし、その後しばらくの間この地に赴くことが困難になり、また *A. spinosa* が分布することも忘れられたため、瀧庸 (1962)・瀧巖 (1964) には記されず、山本 (1971)・瀧巖 (1974) まで降った段階でその分布が再確認されたのではないだろうか。以上は、すべて想像と推測の域をでないが、現下の資料から考えられるもっとも蓋然性の高いものである。

ここでとくに気になるのは、「*Acanthopleura* sp.」が *A. spinosa* であったとすれば、なぜ「*Acanthopleura spinosa*」と記されなかったのかという点である。この疑問は本論全体の中でも最も答えにくい点であり、現在のところ私はこの疑問に対する納得できる答えを持ち合わせていない。Ferreira (1986) には、“*Acanthopleura spinosa* is very distinct from all other species of *Acanthopleura*, posing no problems in identification.” との記述もあり、黒田氏がこの種を見たとすれば容易に同定が可能で、直ちにその種名を「*Acanthopleura spinosa*」と記しただろうと考えたほうが自然である。また、黒田氏によって台湾の多板類をまとめた目録 (Kuroda, 1941) では、台湾産の種として *Acanthopleura spinosa* の記述があり、この種が沖縄群島の近傍に分布していることを認識していた。それゆえ、もしも「*Acanthopleura* sp.」が *A. spinosa* であったとすれば、なぜ「*Acanthopleura spinosa*」と記されなかったのか、ますます理解し難い。あえて想像すれば、台湾産の目録 (Kuroda, 1941) を著した後、この種名を用いることを逡巡させる何らかの事情が生じたのではないだろうか。たとえば、尖閣列島をはじめとした沖縄のいずれかの場所から *A. spinosa* が採集されたという情報は得ていたが、その標本等を現認していないなどの理由から、沖縄群島貝類目録では慎重を期して「*Acanthopleura* sp.」と記したのではないかというのが、当面の私の推測である。

以上の推測を妥当のものとすれば、日本沿岸の *Acanthopleura* 属として、吉岡 (1997) に挙げた5種に *A. spinosa* (ウニヒザラガイ) を加えなければならない*。しかし、生物地理学の観点か

*さらに、先に述べた *Acanthopleura planispina* (ホウライヒザラガイ) についても、小笠原諸島に分布する *Acanthopleura* 属の一種として検討を要する。

ら述べれば、この修正は*A. spinosa*の分布の北限を台湾とするか尖閣列島とするかという(距離として130海里程度の)些細な問題でしかない。生物は、本来 国境などの人為的境界線とは関係なく分布する。だから、*A. spinosa*を日本に分布する種類に加えるべきか否かという問題がなぜ発生するかといえ、台湾と八重山諸島の間に国境線があるから」ということ以外に理由はない。生物学者は、本来ここで述べている国境線といった社会的問題などから独立の「客観的」知識体系の構築を目指しているはずなのだが、自身は勝れて社会的存在であり、その知識体系を伝え・語りかける対象も(生物学者か否かにかかわらず)社会的存在である。それゆえ、しばしば(あるいは専ら)社会的問題に関わりながら研究を進め、その関わりの中で生物学的問題を議論しなければならない運命にある。とくに、戦前から沖縄の本土復帰までの台湾～沖縄の地域は、国境線(境界線)がしばしば変更されている。それゆえ、この地域の生物相に関わった生物学者たちも、その状況に翻弄されることは避けられなかったであろう。また、この地域に生息する生物についての知識が全般に未整理であることも、このような社会状況と無縁ではないだろう。

最後に、これらの地域の生物についての基礎的な知識は、純粹にそこでの生物のあり方を知りたいと願う知的衝動によって支えられてきたものであることを強調したい。ここで引用した文献の多くは、何らの資金的援助も受けずに個人の知的欲求のみによって行われた調査・研究を裏付けにした成果であろうと思われる。どのような時代においても、またどのような社会状況のなかでも、その衝動・その情熱を失わずに、ここにさまざまな知識をもたらしてくれている先人たちに深く敬意を表したい。

旧い文献に記されたわずかな手掛かりから当時の調査場所や採集場所を訪ねたとき、道路や交通機関も整備されていない時代にこの地を訪れた先人の労苦を思い遣ることができる。ハブが潜むかもとおもいつつアダンの藪を踏み分けてその磯におり立ち、かつてここで採集されたかと思うとき、この地に運ばせた衝動と情熱こそ共有されていると信じたい。

謝辞：本稿をまとめるにあたって、国立科学博物館・動物研究部の齋藤寛博士には起稿当初よりさまざまな助言を得たうえ、同博物館所蔵の文献の閲覧・複写などに便宜を図っていただいた。しかし、齋藤氏は*Acanthopleura* sp. = *A. spinosa*とする本稿での主たる考察に対しては慎重な姿勢を示されており、私信を通じてその他多くの可能性についても捨てきれない旨の意見をいただいている。にもかかわらず、同氏には本稿の完成までに少なからず御助力をいただいた。そのご厚情に深く感謝の意を表したい。

また、末筆ながら、黒田先生によって記された「沖縄群島産貝類目録」の日本本土向け増刷分(黒田(1960b)：タイトルは「沖縄産貝類目録」と換わっているが「緒言」以下の内容は黒田(1960a)とまったく同一)の巻頭に添えられた「増刷のことば」の一文を以下に引用し、そ

のお心に謝意を表したい。

「…斯の如き杜撰な業績と雖も、他日その引照の必要が発生するであろうことを慮り、本書一冊を座右に備え、他方将来起るべき後継者のためにも確保して置かれるよう、希願に堪えないものである。文献の生命は現下の小期間に終るものでなく、必ずや将来之を求めて得られない労苦を見ることも明らかなことと察せられるので、厚顔敢て自薦するものであります。」

このお言葉を励みにしながら、この小論が黒田先生のお心にも叶うものであると願いつつ稿を閉じる。

引用文献

- Bergenhayn, J. R. M. (1933) "Die Loricaten von Prof. Dr. Sixten Bocks Expedition nach Japan und den Bonin-Inseln 1914." Kungl. Svenska Vetensk. Handl., Stockholm 12 (4): 1-58, 3 pls.
- Ferreira, A. J. (1986) "A revision of the genus *Acanthopleura* Guilding, 1828 (Mollusca: Polyplacophora)." The Veliger 28 (3): 221-279.
- 藤岡義三・黒住耐二 (1980) "尖閣列島の海産貝類" 沖縄生物学会誌 (18): 51-58.
- 肥後俊一・後藤芳央 (1993) "日本及び周辺地域産軟体動物総目録" 22+683+13+148pp. (エル貝類出版局・八尾)
- 池原貞雄監修 (1983) "郷土の自然" 81pp. (沖縄県立博物館友の会・那覇)
- 久保弘文・黒住耐二 (1995) "生態／検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝" 263pp. (沖縄出版・浦添)
- Kuroda, T. (1941) "A catalogue of Molluscan shells from Taiwan (Formosa), with descriptions of new species." Mem. Fac. Sci. & Agric., Taihoku Imp. Univ. 22 (4): 65-216, 7 pls.
- 黒田徳米編 (1960a) "沖縄群島産貝類目録(頭足類を除く)" iv+106pp.+3pls. (琉球大学教務部普及課・那覇)
- 黒田徳米編 (1960b) "沖縄産貝類目録" iv+106pp.+3pls. (琉球大学教務部普及課・那覇)
- Leloup, E. (1939) "A propos des amphineures *Liolophura japonica* (Lischke, 1873) et *L. gaimardi* (Blainville, 1825): deux nouvelles formes." Bull. Mus. roy. Hist. natur. Belgique 15 (1): 1-7.
- 正木 任 (1941) "尖閣群島を探る" 採集と飼育 3: 102-111.
- 緑間 栄 (1984) "尖閣列島" 196pp. (おきなわ文庫14／ひるぎ社・那覇)
- 宮嶋幹之助 (1900) "沖縄縣下無人嶋探検談" 地學雜誌 11: 585-595.
- 宮嶋幹之助 (1900a) "黄尾島(目次 緒言 第一章 '探検沿革')" 地學雜誌 12: 648-652.
- 宮嶋幹之助 (1900b) "黄尾島(承前)(第二章 '地理及び地質', 第三章 '氣象', 第四章 '植物')" 地學雜誌 12: 689-700.
- 宮嶋幹之助 (1901a) "黄尾島(承前)(第五章 '動物')" 地學雜誌 13: 12-18.
- 宮嶋幹之助 (1901b) "黄尾島(承前)(第五章 '動物', 結尾)" 地學雜誌 13: 79-93.
- 仲宗根幸男・長浜克重 (1971) "尖閣列島の海岸無脊椎動物" p115-128. pls.MI1-5. in "尖閣列島學術調査報告" 140pp. (琉球大学尖閣列島學術調査団／代表・池原貞雄)
- 西平守孝 (1988) "サンゴ礁の渚に遊ぶ" 288pp. (ひるぎ社・那覇)
- 野田泰一 (1992) "軟体動物門・多板綱" pls.59-51. p 251-261. in "原色／検索 日本海岸動物図鑑 [I]" 西村三郎編著425pp. (保育社・東京)
- Pilsbry, H. A. (1893) "Polyplacophora" p.209-350, pls.41-68. in "Manual of Conchology 14" G. M. Tryon (ed.)
- 齋藤 寛 (1994) "カセミミズ・ヒザラガイ類" p95-98. in "山溪フィールドブックス⑨ サンゴ礁の生き

もの” 奥谷喬司編著320pp. (山と溪谷社・東京)

Saito, H. and E. Yoshioka (1993) “An occurrence of *Acanthopleura tenuispinosa* (Leloup, 1939) (Polyplacophora : Chitonidae) from Amami and Okinawa Islands in reference to taxonomic evaluation.” Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. A, 19 (2): 45-50.

杉谷房雄 (1927) “沖縄縣産貝類目録 CATALOGUE OF LUCHU SHELLS” 64pp. (沖縄教育五月特輯 號 第百六拾參號／沖縄縣教育會・那覇)

瀧 庸 (1961) “日本産ヒザラガイ目録” ちりぼたん1 (7/8) : 付録1-8.

瀧 庸 (1962) “日本及び近海産ヒザラガイ類目録” 貝類学雑誌 22 (1) : 29-53.

瀧 庸 (1965) “ひざらがいがい綱” p5-13. in “新日本動物圖鑑 [中巻]” 469pp. (北隆館・東京)

瀧 巖 (1864) “ヒザラガイ類概説” 貝類学雑誌 22 (4) : 401-414.

瀧 巖 (1974) “ヒザラガイ類について <九州貝類談話会第1回総会 講演要旨>” 九州の貝 (4) : 1-13.

山本愛三 (1971) “尖閣列島の貝類相” 長崎県生物学会誌 (2) : 8-12.

山里 清・島袋新功・酒井一彦 (1982) “魚釣島のサンゴ群集” p35-55. in “尖閣諸島周辺漁場調査報告書” 175pp. 沖縄県農林水産部水産振興課

吉岡英二 (1997) “日本沿岸に産するウニヒザラガイ属 (多板綱：ヒザラガイ科) とその分布” 神戸山手女子短期大学紀要 (40) : 145-154.

Yoshioka, E. (1997) “Distribution of *Acanthopleura* spp. (Polyplacophora, Chitonidae) in Iriomote, Ishigaki and Miyako Islands, Okinawa.” 貝類学雑誌 56 (3) : 253-257.

Yoshioka, E. & Y. Nakashima (1996) “Distribution of four species of *Acanthopleura* (Polyplacophora: Chitonidae) in Sesoko Island, Okinawa.” 貝類学雑誌 55 (1) : 41-49.

Yoshioka, E., Y. Ikebe, E. Fujitani & N. Okuda (1999) “Distribution of *Acanthopleura* spp. (Polyplacophora: Chitonidae) in the western part of Iriomote Island, Aragusuku and Kuroshima Islands, Okinawa.” 貝類学雑誌 57 (4) : 79-82.

